

聖書: マタイの福音書1章18~25節

ルカの福音書2章1~5節

説教: 神が私たちとともにおられる

はじめに

アドヴェントの第三週目を迎えております。前回はマリアの所に現れた神の御使いが、あなたは聖霊によって男の子を産むのだと告げられます。夫になるヨセフとは婚約を済ませてはいましたが、まだ正式に結婚していません。申命記には、もし結婚前に妊娠するという事になれば、石打ちの刑に処するようにと書かれています。そこまでされなかったとしても、村の人々からは「身持ちの悪い女、ふしだらな女」と言われ、一生日陰者の人生を歩むこととなります。ですから、「おめでとう、恵まれた方」と言われても、とても喜ぶどころではない。それでもマリアは最後に、「私は主のはしのためです。あなたのおことばどおり、この身になりますように」と健気に告白していった。それが前回までのあらすじでした。

今日はそれに続いて、夫となるヨセフに目を留め、そこにどのような神の励ましがあったか、ともに見てまいります。

1 ヨセフ

1) 身ごもっていることが分かった

18節。「イエス・キリストの誕生は次のようであった。母マリアはヨセフと婚約していたが、二人がまだ一緒にならないうちに、聖霊によって身ごもっていることが分かった。」

御使いから驚くべきことを聞かされたマリアは、これは大変なことになったということで、すぐにヨセフのところへ行って相談します。「実は、昨夜御使いが私の所に現れてかくかくしかじかのことを告げられたのです。ヨセフさん。どうしたらよいでしょうか。」

2) 疑い

これを聞いて、もっともありそうな反応はこうでしょうか。「そんな作り話をだれが信じるか。嘘をつくならもっとまともな嘘をつけ。」

ではヨセフはどうだったか。「さらし者にならなかつたので離縁しようとした」と書いてあります。これはどういうことか。マリアが他の男性と関係を持ったのではないか。マリアを疑いたくはないけれど、そう考えざるを得なかった。だから

離縁しようという結論にしかならない。マリアが語ったことを信じられなかったということです。

こんな場合、普通の男性なら、婚約相手に裏切られたという恨みが募るのではないか。この秘密を村の全員にふれて周ってさらしものにして、マリアをとことん苦しめてやる。今の時代ならありそうな話しです。ヨセフはどうしたか。

3) 正しい人

どうしたらよいか迷いに迷いました。でも、いつまでも迷ってはいられない。マリアのお腹が目立つ前に結論を出さなければなりません。そこでこう考えた。マリアの言っていることはどうしても信じられない。理性的に考えれば、マリアは他の男性と関係を持ったと考えざるを得ない。でもたった一度の失敗で将来の幸せを台無しにさせるのは気の毒とも考えた。なんとか立ち直って生きてほしい。そこで、今回のことは全部ヨセフ一人の心の中に収め、マリアとの婚約は解消しよう。マリアはお腹の赤ちゃんの父親と結婚して、何事もなかったかのように暮らしていけば良い。事を荒立てずにマリアのことを考えて処理しようとした。「ヨセフは正しい人であった」というのはそのような意味です。

2 御使い

1) ダビデの子ヨセフよ

結論を出してすっきりしたか。そんなことはない。本当にこれで良いのか、彼はやっぱり苦しむのです。そんな時に現れたのが、あの御使いガブリエルでした。彼は夢に現れて、こう告げます。

20, 21節。「ダビデの子ヨセフよ、恐れずにマリアをあなたの妻として迎えなさい。その胎に宿っている子は聖霊によるのです。マリアは男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。この方がご自分の民をその罪からお救いになるのです。」

マタイの福音書1章の最初は、「アブラハムの子、ダビデの子、イエス・キリストの系図。」で始まり、その後、人の名前が続いてイエス・キリストがアブラハム、ダビデの子孫として来られたことを強調します。聖書は罪人の救いについて書いてあるはずなのに、どうして系図がわざわざ出てくるのかと不思議に思われる方もいるでしょう。これ

は神がアブラハムとダビデとの間で結んでくださった契約のみことばと大いに関係があります。

「わたしは、あなたの寄留の地、カナンを、あなたとあなたの後の子孫に永遠に所有として与える。わたしは彼らの神となる。」(創世記17章8節) またダビデにはこう語りました。「わたしは、あなたの身から出る世継ぎの子をあなたの後に起こし、彼の王国を確立させる。」(サムエル記第2章12節)

いずれも「あなたの後の子孫」、「あなたの身から出る世継ぎの子」とあって、アブラハムから始まるダビデの家系から救い主がお生まれになることを、旧約ですでに語られていた。

でもダビデの系図につながる者はたくさんいます。いったいそのうちのだれのところに救い主が産まれるのか、具体的な名前までは知らされていませんでした。ところがいまそれが分かった。「ダビデの子ヨセフよ。」ヨセフ、あなたがそれです。

2) 聖霊によるのです

そして続ける。20, 21節。「恐れずにマリアをあなたの妻として迎えなさい。その胎に宿っている子は聖霊によるのです。マリアは男の子を産みません。その名をイエスとつけなさい。この方がご自分の民をその罪からお救いになるのです。」

今回の事件については、マリアの口からしかヨセフは聞いていません。事件の当事者の証言です。どこまで信じていいのかわからない。ところが今、新たな証人が現れ、こう告げた。「その胎に宿っている子は聖霊によるのです。」御使いがマリアと同じことを語りました。それだけではない。名前のごともそうです。「その名をイエスとつけなさい。」マリアも同じことを言っていた。もうこれは疑いようがありません。マリアはふしだらな女ではなかった。最初からマリアは真実を語ってくれていたのだ。それなのに、自分はどうか。マリアを疑いました。もう結婚はできない。でも、マリアのためだという理由をつけて離縁しようとした。自分だけ「いい子」になって、ちっともマリアの苦しみを理解しようとしなかった。自分の罪が鮮やかに浮かび上がってきます。

マリアの苦しみを受けとめようとしなかった自分が、マリアの夫になる資格があるのか。また新たな悩みが浮かんできた時、御使いはこう告げます。「この方がご自分の民をその罪からお救いになる。」まさに自分こそ神によって救われなければならない者であることを自覚した時、救い主が子どもとなって来てくださる。腰を抜かすほど驚いたで

しょう。そして同時にことの重大さにおののきました。自分にはとても荷が重すぎる。しかし御使いは励まします。「恐れずにマリアをあなたの妻として迎えなさい。」

3 神

1) 恐れる者であっても

ヨセフはもちろんごく普通の結婚をするつもりでした。ところが、ある日突然、聖霊によって救い主を産むマリアを結婚しなさいと言われるのです。恐れない方がどうかしています。当時は今と違って出産事故も多かったし、乳幼児の死亡率も高かった。江戸時代の例ですが、無事に大人にまで成長できた子どもはたった六割しかなかったそうです。ヨセフの時代も変わらなかったでしょう。せつかく預かった救い主を無事に育てることができただろうか。それだけではない。時の権力者がイエスのいのちを狙ってきます。罪との戦いの最前線に立つ方になられるのですから、霊的な戦いも激しいものとなるに違いありません。そんなことを考えたら、ヨセフはとても自信がない。尻込みしてしまいます。

2) 神がともにおられるので

もちろん御使いはヨセフが動揺することは、最初から知っています。それで22節以降が出てくる。ここは、マタイ自身の解説というふうにも読めます。でも24節になってからヨセフが眠りから覚めるのですから、これ御使いがヨセフに語ったことと理解することもできる。マリアの身に起きようとしていることは、イザヤが旧約の時代にすでに語っていたこと。それが今成就しようとしているのです。23節。「見よ、処女が身ごもっている。そして男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」それは、訳すと「神が私たちともにおられる」という意味である。」

ヨセフが御使いから「恐れずにマリアをあなたの妻として迎えなさい」と言われた時、重い責任が肩にのしかかってきて途方に暮れました。「恐れるな」と言われて、「はい、恐れませんが」と答えられる人はいません。「恐れるな」と言われても怖いものは怖い。そんなヨセフに御使いは、聖書のみことばで励ましました。「神が私たちともにおられる。だから大丈夫。」ヨセフだけではない。皆さんお一人お一人に、神がともにおられると言うのです。たとえ恐ろしい所を通らなければならないとしても、神はともにおられる。だから一緒に前に踏み出していこう。

ヨセフ。あなたがマリアと結婚して家庭を持ちます。そこにはだれがいるだろうか。二人だけですか。そうではない。あなたの家族となり、あなたの子どもとなって一緒に住んでくださる神がともにおられる。だから安心しなさい。恐れることはありません。あなた一人がんばって困難を切り抜けなさい、と言うのではない。イエス・キリストはともにいてくださる。苦しい時には一緒に苦しみ、悲しい時には一緒に涙を流し、喜びの日には共に喜んで下さる方がおられる。その主を信じて歩みなさい。主はともにいてくださるのだから、信じて一歩踏み出しなさい。

ヨセフは最初、マリアを疑いました。しかし御使いから真実を聞かされた時、マリアの真心を信じる事ができず、妻となる者を愛することのできなかった自分の罪をまざまざと知らされました。神のひとり子の父親となる資格などない、と恐れていた時、御使いは教えてくれた。あなたのところに救い主がお生まれるになる。こんな罪人さえも愛し、その上ともに家族となってくくださる。これが私たちの救い主です。

またこの一週間、救い主を待ち望んでまいります。